

「樹木画テスト 3 枚法におけるウロに関する研究」

A study about scar in tree of dream

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

佐々木 貴 弘

Takahiro Sasaki

序論

わが国における心理検査場面で、最も使用頻度の高いテストとしてバウムテスト、SCT、ロールシヤッハ・テストが挙げられるが、中でもバウムテストは最も使用頻度が高いとされている³⁸。筆者は樹木画テスト（バウムテスト）の中でも、ある特定の描画表現と心的外傷体験の時期との関連について関心を持った。それは、幹に傷や節穴などが描かれた場合、心的外傷体験のサインとして解釈でき、その体験の時期までも測定できるとされるものである。大辻⁴¹は、「現在の投影樹木画法研究における重要な課題のひとつは、児童虐待発見と査定のためのツールとして、虐待によるトラウマ指標の確定とその統合化及び適用にある」とし、ある特定の描画特徴から心的外傷体験について何か示唆が得られることは、今後の危機査定の発展に寄与すると考えられる。

本研究ではこのような問題意識を契機として、以下のことを報告する。

- ①「心的外傷体験（出来事）」のサインとして、どのような描画表現を採用するのかについて、それを象徴表現として読み取る方法とサインとして読み取る方法の二通りを用いてアプローチした。その結果、これまで心的外傷体験のサインと考えられたもの以外にも該当サインとして採用できる可能性のある描画表現の存在が示唆された。
- ②それらの該当サインについて、どれだけの出現頻度があるのかを 3 枚法を用い、1・2・3 枚目それぞれについて見ていき、その出現頻度からどのようなことが考えられるのかについて考察した。
- ③心的外傷体験の描画表現からその体験（出来事）の時期を推測することに関して、心理学的サインとして採用することができるのかについて、調査し考察した。
- ④複数枚に該当表現が描かれたケースについて、それらの描画表現をどのように解釈できるのかについて、考察した。

I. 研究史

ウロと心的外傷体験の関連についての、これまでの研究は大きく 2 つに分けられる。それは英語圏

で発展したH.T.P.テストの樹木画におけるウロ（scar）と、ドイツ・フランス語圏で発展したバウムテストにおけるヴィトゲンシュタイン・インデックス（Wittgenstein-Index）である。本章では、この2つの流れについてボーランダー（Bolander）⁶を参考にしながら概観し、日本ではどのような研究がなされてきたのかをまとめる。そして、そこで見出される問題点について述べることにする。

1. HTPテストにおけるウロの研究

樹木画において、初めてウロを心的外傷体験のサインとしたのは、バック（Buck）に始まるHTPテストにおいてである⁷。そこでは、「〈樹木〉の幹にある傷跡、折れたり破損している枝の場合、ほとんどきまって、被験者の過去における心的外傷が残した“生々しい傷跡”を表していることがわかった。そしてこの外傷体験（エピソード）の起こった時期は、幹の根元（地面にもっとも近い幹の部分）が幼児期を表し、〈樹木〉の頂上が被験者の現在の生活年齢で、その根元と頂点との間はその間の年齢を表しているとの仮定に立って、およそその測定が可能である。…ただ、被験者自身が“傷ついた体験”をとらえている出来事だけが象徴化されると仮定されるので、第三者からみて永続的に傷跡として残っていると考えられる出来事とは必ずしも一致しないことがある」とされている。

この記述から分かることは次の3点である。第1に、問題となる出来事が起こったときの年齢と、心的外傷体験を表すサインの高さとの関係について、木全体の高さや描画時の被験者の年齢の関係を調べている。第2に、出来事が心的外傷体験となるかどうか、客観的評価からではなく、被験者の主観的基準によると考えている。第3に、描かれた木の測定に当たり、バックは幹の根元から測定していることである。

2. コッホ（K. Koch）のバウムテストにおけるウロの研究

コッホの書物の初版¹⁹では、重要な出来事の時期を確定するために、樹木画に外傷の印を用いることについては何も述べていなかった。しかし改訂版²²で、ヴィトゲンシュタイン・インデックスについて1章をさいている。これは、ドイツの神経学者ヴィトゲンシュタイン（G. Wittgenstein）博士との書簡を通じて、コッホが注目した方法なので、こう名付けたのである。ヴィトゲンシュタインの注目すべき発見は1950年代中頃になされたと考えられるが、明らかにヴィトゲンシュタインもコッホも、前節で紹介したアメリカの研究者の研究には気付いていなかった。コッホの理論的根拠は次のようである。「ある時に描かれた木が、描いた人のその時の状況にのみ対応すると考えるなら、被験者の人生と木に等しく表れる測度をみいだしうる。この考えによる最初の試みは、既に私の推測を確認していた」²²。

コッホの方法は木の高さをミリメートルで測定し、これを被験者の年齢（暦年齢を月まで数えたもの：月は年の分数で表す）によって割る。この指数はコッホがヴィトゲンシュタイン・インデックスとよんだ指標 i となる。そして何らかの外傷の印や、その他おもな枝の方向の歪みなど、木の突然の

変化の印を、木の根元からミリメートルで測定し、それを i で割ると、その出来事が生じた正確な年齢が示される。コッホは他の計算では根の領域を除いているが、この場合は測定にあたり根を考慮に入れていることに注意する必要がある。

3. 日本における研究

日本では、深田によって初めてウロと心的外傷体験の関連について報告された¹⁷。そこでは本章第一節で紹介したHTPテストにおける幾つかの研究が紹介されている。それ以降、高橋⁴⁶によって、小学生から高校生までにおける「傷跡のある木」の出現率が報告されている。また、高橋⁴⁸では「幹の傷跡、汚れ、穴」が心理的・生理的な外傷経験を持つことを示すとされている。高橋のこの報告では、「幹にうつろな穴をかく被験者はそれほど多くないし、この穴から動物がのぞいている絵はめったにない。しかし、これが成人によってかかれるときは、人格が崩壊し、自我の統制力が失われていることを示しやすい」としている。この解釈仮説は他の研究では報告されていない。HTPテストの文脈では他に、三沢が統合型HTPテストの研究³¹において、幹に描かれた「うず」の出現率を報告しているが、その解釈については触れられていない。

樹木画単体の文脈では、大辻⁴¹が樹木画におけるトラウマチェックリストの作成を試みている。その中で、「折れた枝」や「傷、穴、節穴」が項目に選定され、トラウマと関係すると報告されている。また、その時期の決定方法について、バックの方法とコッホの方法の両方で算出し、「今後教示法の違いによるトラウマ指標の出現に関するリサーチや詳細な事例の比較研究が必要であろう」と締めくくっている。加えて、佐藤ら⁴⁵、小川^{39・40}では、一般の学生を対象にして「幹の傷又は枝の切り跡」の出現率が報告されている。しかしこれらの研究は、出現率のみの報告で、これらと心的外傷体験との関連については触れられていない。

これまで述べてきたように、日本における研究は、HTPとバウムテストの両方から影響を受け、混じりあったものになってしまっている。

II. 目的

ウロと心的外傷体験の関係については、バックに始まるHTPテストから樹木画にアプローチする研究の方が、コッホらによるそれよりも歴史的には先に指摘しているのだが、ポーランダー⁶によれば、コッホもヴィトゲンシュタインもアメリカにおけるバックのウロに関する研究を知らなかったとされている。別々の研究ルートから、両者が同じような方法でウロを心的外傷体験のサインとしていることは、それが臨床的に妥当なサインである可能性が高いと考えることができるのではないだろうか。実際に、必ずしも描かれるとは限らない場合も数多くある¹³とされながらも、ウロを心理学的なサインとして取り上げているものが多くある^{11・15}。日本においては、深田³²によって第一章第一節で挙げた

H.T.Pテストにおける研究が紹介されたことに始まって、その出現率が報告されている。しかし、やはりその妥当性については論じられていない。また、「樹木画の特徴を、より細かく、正確に、そしてそれらが利用者間の共通の情報として把握できるように」考案された『バウム・テスト整理表』²⁴において、ヴィトゲンシュタイン・インデックスがチェック項目に入れている。しかしながら、それらが心的外傷体験の時期とどれだけ一致するかについての研究は行われておらず、「一般にはその正当性は認められるまでには至っていない」²³という評価を受けている。

加えて、従来は心的外傷体験の描画表現と紹介されてきたが、ポーランダーは「生活の劇的な変化」⁵と考え、いわゆるトラウマ的な体験に限定するのではなく、過去の出来事・体験の中で環境の変化や転機となった出来事が表現されるとしている。心的外傷体験以外に、具体的にどのような体験が表現されるのかについて、これまで調査された研究は見当たらない。

さらに、どのような描画表現が心的外傷体験の描画表現とされるかについても諸説がある。バック⁷においては「幹にある傷跡、折れたり破損している枝」としており、コッホ²²では幾つかの例は示されているが、具体的にどこからどこまでが心的外傷体験の描画表現とするかについては述べられていない。日本における高橋の研究⁴⁶では、「傷跡（scar）・節穴・切株・普通でない影」の出現率とされており、「普通でない影」が含まれている。「普通でない影」とは具体的にどのようなものを指すのか示されていない。このことから、心的外傷体験の描画表現として何を採用するかという問題も見えてくるであろう。

また、大辻⁴¹によれば、体験の時期の算出に際して、「地平線から頂上までを測定対象とする分析方法（Buck法）」（代表的なのはBuck⁷、Fernandez¹⁵など）と「根から頂上までを測定対象とする分析方法（Koch法）」（同じくJ.Lyons²⁹、K.Koch²²など）が存在するとされており、「Buck法」を採用している。その理由は「カウンセリング対象者のトラウマ体験の時期と樹木画のトラウマ指標の樹高上の位置が一致するからにはほかならない」ためとしている。しかし、その報告内において「教示によっては一致が見られない」との指摘もしており、どちらがより正確であるかは判断できない状態にある。また、教示との関連で言えば、カスティエラ（Castilla）^{10・12}によって紹介され、桑原ら^{25・26}や盛山ら³³等によってその有効性が紹介されている、樹木画テスト「3枚法」と心的外傷体験の描画表現の関係についての研究は行われていない。

以上のことより、現状の課題として以下のものを挙げることができるであろう。

- ① どのような描画表現を心的外傷体験の表現として解釈するのか。
- ② 心的外傷体験の時期を示唆する描画表現はどれだけの出現率があるものなのか。
- ③ 描画表現から時期を算出することは、妥当性のあるものなのか。あるとすれば、どのような算出方法が最も一致率が高いのか。
- ④ 3枚法における心的外傷体験の描画表現はどのように描かれどのように解釈できるか。

本研究では、上記の問題点について調査、考察していくことを目的とする。尚、筆者が新たに心的

外傷体験の表現として採用できるのではないかと考えたものは、幹の両側の切れ目、幹にとまる虫、幹に描かれた顔、幹に描かれたうずである。このことは、V - 1 - (5) で述べる。

Ⅲ. 方法

目的に沿って、本研究では大学生・大学院生を対象として、樹木画テスト（3枚法）を実施し、従来の研究で「心的外傷体験のサイン」とされる描画表現を描いた被験者に対して質問紙調査を行った。以下、被験者、調査の実施方法、質問紙の構成を説明する。

1. 被験者

調査対象者は、都内にある私立A大学の学生（2～4年生）、同じく私立A大学大学院の院生（修士課程1・2年）計131名。学部生は、精神保健に関する講義を受講している学生で、前期の期末テスト後に、講義の担当教授と筆者の依頼に応じて回答した。大学院生は、臨床心理学専修課程において心理査定に関する講義を受講している学生で、その講義内で担当教授と筆者との依頼に応じて回答した。謝礼は提示していない。両者ともに、調査開始時に口頭で説明合意を得ている。性別の内訳は男性40名女性91名で、平均年齢は20.8歳（19歳～25歳）である。

2. 調査の実施方法

調査は、学部生は大学構内の大教室において集団配布個別回収形式で施行した。大学院生は講義の担当教授のゼミ室において集団配布個別回収形式で施行した。手順としては、始めにA4用紙3枚を配布し、樹木画テストをカスティエラによる3枚法の教示^{10,12}で実施した。ウロなどの該当する描画表現を描いた被験者に関して、回答を拒否することは何ら問題ないと説明した上で質問紙の回答を求めた。各々の描画について、該当する描画表現から「Buck法」・「Koch法」⁴¹両方で時期の計算を求め、算出された時期に被験者が何かショッキングな出来事を経験していないかを○×で記入してもらった。算出された時期に何かしらの体験をしていると回答した被験者について、その体験の内容を選択・記述を求めた。実施時間は5～60分であった。

Ⅳ. 結果

1. 基礎データ

全回答者131名のうち、描画に不備があった回答者2名は、分析の対象外とした。そのため、最終的に129名が有効回答者となった（男性38名女性91名、平均年齢20.7歳）。表0に有効データに関する基礎情報をまとめた。

表0 基礎データ

全回答者数	131
有効回答数	129
性別	男性38、女性91
年齢	19～25歳（平均20.7歳）
期間	平成18年7月1日～31日

2. 該当描画表現の出現率

3枚を通して、従来における研究で心的外傷体験を表すとされる描画表現をどこかに1つでも描いた人数は49人であった（表1）。1枚に複数種類の描画表現を描いた被験者がおり、出現頻度としての延べ数は表2にあるように52人と微増している。3枚を通しての出現頻度はおよそ4割であった。

表1 従来の心的外傷体験サインの描画人数(1)

	描画人数	内訳（男性/女性）
1枚目	10	4/6
2枚目	8	0/8
3枚目	32	10/22
合計	50	14/36

表2 従来の基準による出現頻度（延べ数）

	数	割合
1枚目	12	9.3%
2枚目	8	6.2%
3枚目	32	24.8%
合計	52	40.3%

同じく、該当描画表現を描いた人数をその表現ごとにまとめると以下のような結果となった(表3)。複数枚にその表現を描いた被験者、1枚の描画に複数種類の表現を描いた被験者がいたため、表1とは違う合計人数となっている。ウロ・節穴の表現が最も多く、そのほかは少数であった。描画の具体例については、図1～4に示す。

表3 従来の心的外傷体験サインの描画人数(2)

	描画人数	内訳（男性/女性）
ウロ・節穴	36	11/25
幹の傷	2	0/2
裂けた幹	1	1/0
切られた枝	7	1/6
合計	46	13/33

表 4 従来の心的外傷体験サインの出現数

	描画表現数
ウロ・節穴	42
幹の傷	2
裂けた幹	1
切られた枝	7
合計	52

図 1 : うろ

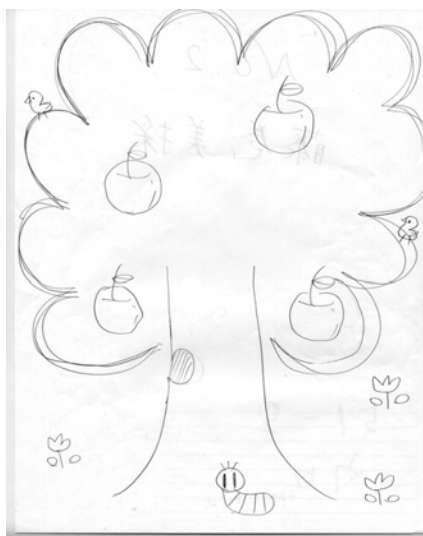


図 2 : 幹の傷（と幹にとまる虫）



図 3 : 裂けた幹

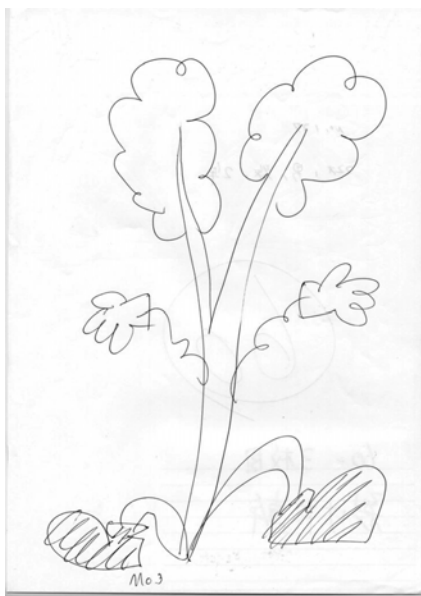
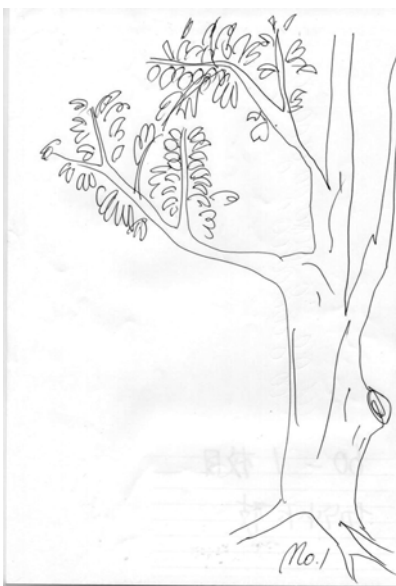


図 4 : 切られた枝



本調査において、ウロなど従来心的外傷体験の表現とされてきたもの以外にも、幹に特徴的な表現が数多くあった。高橋⁷²の「普通でない影」、三沢³¹の「うず」等を参考に、筆者は「幹の両側の切れ目」「幹にとまる虫」「幹に描かれる顔」「幹に描かれるうず」をウロと同じように解釈できる描画表現なのではないかと考えた。このことについては、V - 1 で述べる。

これらの表現を描いた被験者は63名で、3枚についてほぼ均等に描かれた（表5）。表6は表3と同じように、表現ごとに描画人数をまとめたものである。

表5 可能性のある描画表現の描画人数(1)

	描画人数	内訳（男性/女性）
1枚目	21	8/13
2枚目	18	6/12
3枚目	24	8/16
合計	63	22/41

表6 可能性のある描画表現の出現頻度（延べ数）

	数	割合
1枚目	22	17.1%
2枚目	18	14.0%
3枚目	25	19.4%
合計	65	50.4%

表3・4と同じように、描画表現ごとに人数をカウントしたものが表7・8である。それぞれ、具体的には、図5～8に示すようなものを該当表現とした。

表7 可能性のある描画表現の描画人数(2)

	描画人数	内訳（男性/女性）
両側の切れ目	26	8/18
虫	2	1/1
顔	13	3/10
うず	11	5/6
合計	52	17/35

表8 可能性のある描画表現の出現数

	描画表現数
両側の切れ目	34
虫	2
顔	13
うず	16
合計	65

図5：幹の両側の切れ目

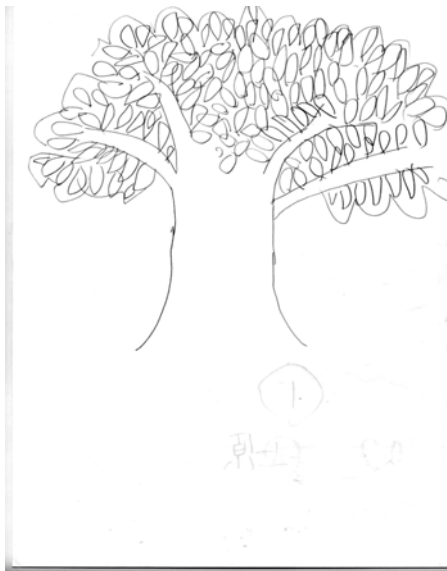


図6：幹にとまる虫



図7：幹に描かれた顔



図8：幹に描かれた渦



従来の心的外傷体験サイン、また、それと同じように解釈できるのではないかと考えた描画表現の両方を合計した出現頻度は以下の表9、表10ようになった。全体で5割以上の出現率で、そのうちの半分が3枚目に描かれた。5人に1人の被験者が1、2枚目に描かず3枚目のみに描いていた。

表9 出現分布

	数	割合	出現率
1 枚目のみ	8	11.0%	6.2%
2 枚目のみ	9	12.3%	7.0%
3 枚目のみ	29	39.7%	22.5%
1, 2 枚目	2	2.7%	1.6%
2, 3 枚目	4	5.5%	3.1%
1, 3 枚目	13	17.8%	10.1%
1, 2, 3 枚目	8	11.0%	6.2%
合計	73	100.0%	56.6%

表10 出現数（延べ数）

	数	割合	出現率
1 枚目	31	28.7%	24.0%
2 枚目	23	21.3%	17.8%
3 枚目	54	50.0%	41.9%
合計	108	100.0%	83.7%

3. アンケート回答者をもとにした結果

本研究では該当する描画表現を描いた被験者に対し、質問紙の回答を求めたが、その回答者は16名（男性4名、女性12名）だった。本節では、その16名についてみていく。

（1）出現率について

16名について、該当描画表現の出現分布を見ると、以下の表11・12のようになった。全体のデータである表9・10と同じように、3枚目が多く、次いで1枚目、2枚目の順になっている。

表11 質問紙回答者におけるウロ分布

	数	割合
1 枚目のみ	3	18.8%
2 枚目のみ	1	6.3%
3 枚目のみ	6	37.5%
1, 2 枚目	0	0.0%
2, 3 枚目	0	0.0%
1, 3 枚目	4	25.0%
1, 2, 3 枚目	2	12.5%
合計	16	100.0%

表12 アンケート回答者における出現分布

	数	割合
1枚目延べ数	9	37.5%
2枚目延べ数	3	12.5%
3枚目延べ数	12	50.0%
合計	24	100.0%

(2) 時期の一致について

何か出来事（体験）の時期と一致した被験者の数は14名でおよそ9割であった。一致していないと回答した被験者はおらず、2名は覚えていないという回答であった。

表13 時期の決定

	数	割合
一致	14	87.5%
不一致	0	0.0%
覚えていない	2	12.5%
合計	16	100.0%

時期が一致した14人について、その描画表現が何枚目に描かれたのかをまとめたのが表.14と表.15である。表.10の「1あり」「2あり」「3あり」はそれぞれ1枚目、2枚目、3枚目に該当する描画表現が描かれたことを表す。表.16はそれぞれの一致率をまとめたものであるが、9割以上が何かしらの体験と一致しているとの結果が得られた。

表14 何かしらの出来事の時期と一致した描画表現の所在 (1)

No.	1あり	2あり	3あり	1枚目一致	2枚目一致	3枚目一致
1	○			○		
2	○	○	○	○	○	
3	○			○		
4	○		○	○		○
5			○			○
6			○			○
7			○			○
8			○			○
9			○			○
10	○		○	○		○
11	○	○	○		○	○
12	○		○	○		○
13	○			○		
14		○			○	

表15 何かしらの出来事と一致した描画表現の所在（2）

	数	割合
1 枚目	3	21.4%
2 枚目	1	7.1%
3 枚目	5	35.7%
1, 2 枚目	1	7.1%
2, 3 枚目	1	7.1%
1, 3 枚目	3	21.4%
1, 2, 3 枚目	0	0.0%
合計	14	100.0%

表16 時期の一致率について

	一致した数	一致率
1 枚目述べ数	7	87.5%
2 枚目延べ数	3	100.0%
3 枚目延べ数	9	90.0%
合計	19	90.5%

※一致率＝（一致した数／出現数）で算出

時期の計算については、根から計測する方法（Koch法）と地面から計測する方法（Buck法）があるが、今回の調査では前者の方が高い割合で一致した。表17にある「両方」というのは、地面と根の先端がほぼ同じ高さに描かれた描画という意味である。具体例は図9～10に示す通りである。

表17 一致した際の計測法

	数	割合
バック法	2	14.3%
コッホ法	8	57.1%
両方	4	28.6%
合計	14	100.0%

図9：両方で一致



図10：両方で一致

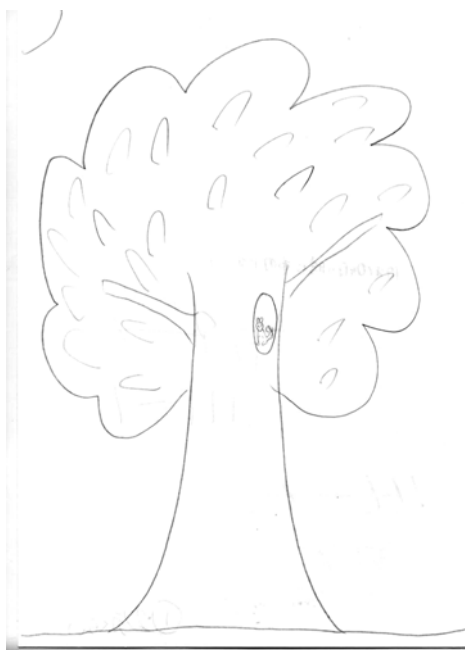


図11：根から計算

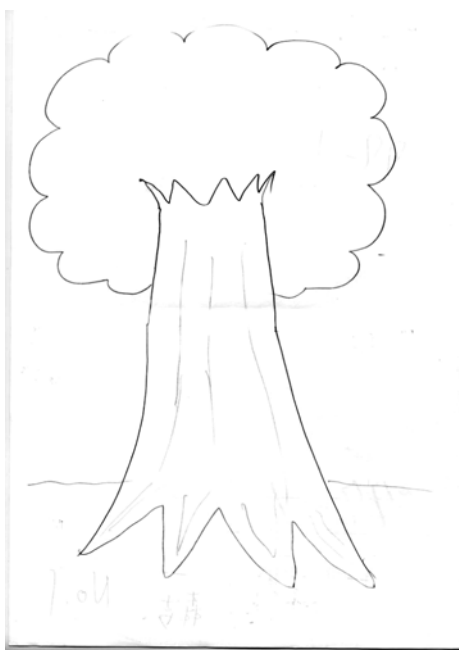


図12：地面から計算



表14における該当描画表現をまとめたのが表18である。No.2の3枚目とNo.11の1枚目以外、すべて何かしらの出来事の時期と一致していることが分かる。表18において、「うろ」は9例が一致、「切られた枝」は2例が、「うず」は5例が、「両側の切れ目」は1例が、時期と一致している。

表18 時期一致者におけるウロの種類

No.	1 枚目	2 枚目	3 枚目	1 枚目一致	2 枚目一致	3 枚目一致
1	うず			○		
2	うず	うず	両側の切れ目	○	○	
3	切られた枝			○		
4	両側の切れ目		うろ	○		○
5			うろ			○
6			うろ			○
7			うろ			○
8			うろ			○
9			うろ			○
10	切られた枝		うろ	○		○
11	うず	うず	うろ		○	○
12	うろ		うろ	○		○
13	うず			○		
14		うず			○	

全体のデータの中で、複数枚に渡って該当表現を描き、そのうち一つでも表7で挙げたような表現が描かれたケースが20例あった。それらの表現が他の該当描画表現とどれだけその描かれた位置（相対的高さ）が一致するのかをまとめたものが表19である。No.1 - 8は3枚ともに描かれたケースである。3枚ともが同じ高さに該当サインが描かれたのは「○」、3枚中2枚が同じ高さに描かれたものは「△」、3枚とも違う高さに描かれたもの「×」とした。高さが一致しなかったものは括弧でくくった。No.9 - 20は2枚に描かれたケースで、同じように同じ時期を示しているものは「○」と表記している。

3枚ともに描かれたケースにおいては、8例中5例が3枚ともに同じ時期を示しており、2枚までが同じ時期を示しているものが2例、1枚も同じ時期を示していなかったものが1例であった。同様に、2枚について該当する表現が描かれたケースについては、12例中3例が同じ時期を示していた。描画表現の内訳（他の描画表現と高さが一致したケース／描かれた延べケース数）をみると、「うず」は5／6、「虫」は1／1、顔は1／2、「幹の両側の切れ目」は3／14であった。

3枚ともに描かれた場合、殆どのケースにおいてその指し示す時期が重なり、2枚に描かれた場合も一致しているケースが見られた。

表19 描画表現と高さの一致について

No.	1 枚目	2 枚目	3 枚目	高さの一致
1	(両側の切れ目)	(両側の切れ目)	(両側の切れ目)	×
2	両側の切れ目	両側の切れ目	両側の切れ目	○
3	うず	うず・うろ	うず	○
4	うず	うろ	顔	○
5	うず	うず	(両側の切れ目)	△
6	うず	うろ	うろ	○
7	両側の切れ目	両側の切れ目	両側の切れ目	○
8	(うず)	うず	うろ	△
9	(両側の切れ目)	(両側の切れ目)		×
10	(両側の切れ目)		(顔)	×
11		(両側の切れ目)	(顔)	×
12		(両側の切れ目)	(顔)	×
13	(うろ・切られた枝)		(両側の切れ目)	×
14	うろ		両側の切れ目	○
15	(うず)		(うろ・うず)	×
16	両側の切れ目		うろ	○
17		(両側の切れ目)	(うろ)	×
18		虫・幹の傷	うろ	○
19	(両側の切れ目)	(両側の切れ目)		×
20	(両側の切れ目)		(うろ)	×

(3) 体験の内容について

質問紙に回答した14名について、その出来事の内容をまとめたものが表.16である。

表20 一致した体験の内容

	数	割合
A) 引越し・転校	4	28.6%
B) 近い人との離別	2	14.3%
C) 妹・弟が生まれる	1	7.1%
D) 事件に遭う・目撃する	1	7.1%
E) その他ショッキングなこと	6	42.9%
F) 答えたくない	0	0.0%
合計	14	100.0%

(4) 該当描画表現について複数枚描かれた描画について

複数枚に渡って該当描画表現が描かれ、それらが何かしらの出来事と一致したとの回答が得られたものについてまとめたのが表.16である。「高さの一致」欄は、表.15と同じ基準を用いて表記した。

表21 ウロが複数枚描かれ、それらが何らかの出来事と一致したケース

	1枚目	2枚目	3枚目	1一致	2一致	3一致	高さの一致	体験内容
1	○	○	○	○	○		△	父の死（2枚目）とその自覚（1枚目）
2	○		○	○		○	○	引越し（2つの時期両方に一致）
3	○		○	○		○	○	初潮・骨折
4	○	○	○		○	○	△	両親の秘密を知ってしまった
5	○		○	○		○	○	転校

V. 考察

1. 心的外傷体験の存在を示唆する可能性のある描画表現について

表3・4に示したような、従来の心的外傷体験の描画表現に加えて、表7・8に示したような描画表現が、人生における何かしらの出来事の時期と一致したということは表18で述べた。また、表19において、表7・8で示したような描画表現が、その他の描画表現と同じ時期を示していることを述べた。このことから、それらの描画表現が、被験者の人生における何かしらの出来事の時期を示す可能性があると考えられるのではないだろうか。

以上のことから、従来挙げられていたウロ・幹の傷・裂けた幹・切られた枝等に加えて、幹の両側の切れ目・幹に止まる虫・幹に描かれた顔・幹に描かれた渦も、描画者の傷つきを表現するサインとして採用できる可能性があると考えた。特に、幹の両側の切れ目に関しては、描かれた二次元の描画を三次元で捉えることによって、より被験者の内面について示唆が得られる可能性があると言えるのではないだろうか。そこで、どのような描画表現を「心的外傷体験」のサインとして採用するのかについて調査した。

（1）樹木画テストにおける幹の解釈仮説

コッホ^{20・21}では、「幹は中心部をなし、左右のバランスをとっている。この幹の中心的機能が、幹が枝を支えていることとあいまって、幹を木の組成中最も安定した要素にしている。…幹は中心をなし、真ん中にあり、支えである。幹は枝とともに骨組み、すなわち本体を構成し、飾りとしての存在である葉とは対照的に、永続的で、安定し、なくなることがない。木がかかれる場合、木の本性が認識されている結果、天賦の才能に関連したものはすべて葉の部分よりはむしろ幹や枝の部分にはっきりと投影されると仮定できる」とされ、「内的素質、すなわち、本能や生命力」が象徴されていると解釈する。

ボーランダー⁴は、「幹は情緒機能との内的関係を明らかにする部分」と考えている。具体的には、根から幹への移行領域である下の部分は、「暗く原始的で神秘的な情緒の存在する所とみなされる。これは原始的な同一化や民族的同一化、子宮への憧れ、大洋感情などの場所」である。幹と樹冠の移行

領域である上の部分は、「社会的に受容されるものとして、一般に認められている高い水準の情緒や感情反応」を表現している。その間の部分は、「特殊な印で強調されるとき、気付いて経験されることもそうでないこともあるが、一般に社会的に受容されない情緒と関連している。つまり、怒り、快楽、復讐、同胞間の嫉妬など」を示している。

アヴェ＝ラルマン²は、「〈並存関係〉に基づいた社会的共同体の中にある個々人を象徴する。幹が示唆するのは描く人の社会性であって、〈相互関係〉と関わる樹冠の様式にみいだされる人間性ではない」としている。

フェルナンデス¹⁴によれば、ストラとカスティーラは「幹は自我の能力を反映している。観念の領域、自我、超自我を表現している。幹の描き方や形態に、基本的な自我感情と心理的発達が反映される。幹は性格やこれまでの生きかたに結びついている」とされる。

レボヴィッツ²⁷では、「主観的な意味では、内的強さについての描き手（あるいは重要な自己対象）の感情と関係がある。代理（vicarious）体験の意味としては、その人が「世にある」ための能力」を表すとされている。

高橋ら⁴⁹においては、「幹は樹木の中心となる部分であり、①被験者の自我強度、②生命力、精神的エネルギー、内的衝動の流れ、③感情機能の働きを象徴している」とされている。

以上のように見ていくと、第一項で示されたように人間の象徴としての樹木において、幹はその本体であり、感情情緒の働き、描き手の自我の強さ、自我感情を表現していると言える。

（2）樹木画におけるクロノジカルな時間経過について

樹木画テストの作業仮説の一つに空間図式があるが、諸家の仮説を見ていくと、どの考え方も類似している点が多い。

ボーランダー³は、用紙の縦軸方向について、下から「本能領域」「情緒領域」「精神領域」の3つの領域に分け、根は本能の性質、幹は情緒的生活を表し、樹冠は精神的・知的な解発に関係すると述べている。アヴェ＝ラルマン¹においては、上部（樹冠、幹）は人格発展を象徴し、下部（根）は死活にかかわる意味があり、固着した存在と庇護された存在を示すと考えた。

こうしてみると用紙の上下方向では時間の流れが成長に関連していると考えられるので、根元は養育体験、幹から樹冠にかけては人格の発展を意味することになる。上下方向はクロノジカル（chronological）の時間が表現されているとみなすことができる。このことについてボーランダーは、「木が上方に生長するのとまったく同じように、生活も下から上方に発展し、最上部の枝の上には未知の未来が示されている。こうして時系列上の時間、あるいは発達の特定の段階に生じる出来事によって生じる出来事によって測定される時間は、縦軸にそって表現される」としている。この縦方向をクロノジカルな時間経過に当てはめる考え方に関しては、カスティーラ^{9・11}、バック⁷やレボヴィッツ²⁸など、多くの研究者が採用している。

この考え方を証明するものが、本調査において行ったような時期の算出である。「描いた木の高さは

測定可能であり、それが描画時の被験者の年齢と相関しているので、縦軸にそって樹木画に記録されている過去の痕跡（例えば外傷の印）の時期は、かなり正確に決めることができる」³というこのことによって、それが表れていると言えよう。

（3）心理学的サインとしてのウロ

傷跡とはいわば幹の模様であるが、高橋⁴⁷は「明確に傷跡や節穴に見えなくて、単に幹の汚れに見える場合も同じ意味」をもつことを報告しており、幹の樹皮の表現であると同時に自我感情の領域に何気なく描かれた汚れのようなものも「ウロ」と同等の意味があるとしている。これについては、描画者がペンで幹に傷をつけたと解釈することができるのではないだろうかと考えた。このことから、今回の調査の表18・19で示したような「幹の両側の切れ目」や「うず」に注目した。幹に描かれたウロ以外の模様（表7・8で挙げたもの）に関しても、ウロと同等の解釈ができるものがあるのではないだろうか、ウロの表現を拡大して調査を行った。表7・8で示した「可能性のある描画表現」のうち、「虫」や「顔」、「渦」については、高橋の「汚れ」⁴⁷と同じように、描画者がペンで幹に傷をつけた模様と考えて本考察の対象として採用した。「幹の両側の切れ目」については、三次元のものを二次元の世界に描く行為をするとき、描画者の思いを解釈するために、描かれた二次元の描画を三次元の世界で捉えなおす作業を考えた。幹の両側に切れ目があることは、三次元で捉え直したとき、真横から穴が開いている表現とみることができるのではないかと考え、本考察の対象に採用した。その結果、表18の通り、渦については5例、幹の両側の切れ目については1例、該当する体験があったとの回答があった。

また、表19について見ていくと、それぞれが従来の研究で心的外傷体験のサインとされるものと同じ時期を示していることがわかる。用紙の縦軸という、描画者のクロノロジカルな時間経過の中で、その描画表現が全く同じ時期（相対的高さ）を示しているということを鑑みると、本研究で述べた「うず」、「虫」、「顔」、「幹の両側の切れ目」は、ウロと同等の解釈をすることが可能なのではないだろうか。樹木画テストにおける心理学的サインはこれまでもそうであったように、象徴から調査研究が続けられ練り上げられてきたものである。ここで示したように、ウロの表現がいわゆる傷跡が表現されたものだけを言うのではなく、幹に描かれた様々な表現がウロとみなせる可能性がある。よってこれらはウロのサイン、つまり、心的外傷体験の心理学的サインとして上に述べた描画表現が採用できると言えよう。

以上、本節では樹木に関する様々な象徴を紹介した。それらと今回の調査から、従来の心的外傷体験のサインに加えて、新たに同様の解釈ができるサインを発見した。そしてこのことは、バックやコッホら、草創の研究から主張され続けてきた通り、被験者そのものが樹木画に表現されているということを再確認させるものであった。

2. 3枚法におけるウロの出現率について

本研究と同じように、一般の大学生・大学院生を対象にして樹木画テストを行った先行研究について、該当体験サインの出現率を見ていくと、中尾ら³⁷では132名中「わずか数名」、佐藤ら⁴⁵では約21%、小川³⁹と小川ら⁴⁰では17年間で3.5～14.1%（平均9.22%）と、それぞれ報告している。これらの研究ではいずれも、幹の傷跡や折れた枝などのような象徴としてのウロのみを採用している。

本研究において、1枚目における出現率は24%だが、先行研究と同じ基準を用いた場合の1枚目における出現率は、表2より9.3%であった。このことから、1枚目の出現率を比較した場合、これまでの研究との間に大きな差異は見られない。前節第五項で考察したサインも一括した場合の1枚目における出現率は表.10より24%であった。先行研究と比較して、1枚目は同程度のものではあったのにも関わらず、3枚目における出現率は約42%となっている。

また、表.9・10より、1枚法よりも2枚法や3枚法の方が該当サインが描かれやすいと言える。特に、1枚目に描かれずに3枚目に描かれたものは33ケースで25.6%であった。このことは、3枚法の実施方法・教示が被験者に対して何かしらの影響を与えたものと考えるのが普通であろう。

「3枚目を描く」ということに関して、桑原ら²⁵は「1枚目は、テスト場面に慣れていなかったり、評価されるという緊張感があって、社会的に望ましい（と被験者が考えている）自己像が投映されやすいといえ、2枚目については、教示の変化と場面への慣れによって、より内的に深い内容が投映され、3枚目は、教示により、ファンタジーの内容が投映され、結果的に欲求や願望が投映される」と報告している。1枚目から2枚目への移行の際に生じる「場面への慣れ」が、当然のことながら2枚目から3枚目への移行の際にも生じていることが考えられる。このことが、3枚目に多く該当サインが描かれた理由の一つとして考えられる。

また、「夢の木」を描かせるという教示は、全く自由に木を描かせるよりも、描画の自由を制限する（具体化する）働きをしている。前川³⁰は、描画の自由をある程度制限することは、描画体験のプロセスを深める要因であると報告している。これは、検査者が一定の枠組みを用意することで、被験者が安心して自分の内面を表現しやすくなると言い換えることができるのではないだろうか。ルービン⁴³でも、「イメージの作者が最も困惑するのは、状況にどう正しく対応してよいのかはつきりとせず、（中略）芸術的不全感を覚えたことのある今までの体験のすべてが思い出されてしまうようなときである」とされており、検査者が方向性を示すことは、全く自由に木を描かせることよりも、表現を促進することができると考えられる。検査者側が枠を設定することに関して、それを視覚的・物理的に設定する「枠づけ法」^{34・35}においても、幹の傷や枝の切断が描かれやすくなるという報告がされている³²。このように、内的・外的に適切な枠を設定することは、被験者に安心感をもたらし、内面的表現を描きやすくさせるのではないだろうか。

さらに、中野³⁶は「芸術創造、芸術享受という、合理的な自我が非合理的なエス（無意識）に浸蝕された状態、つまり夢にふけっている心理状態では、意識はゆるんで非言語化される。この、言語

と直接関係のある意識がゆるんで、無意識が表面に現れでる」としている。「夢の木」という、1・2枚目よりもさらにファンタジックな想像が要求されることにより、意識の蓋がゆるみ、より深く内面を表現する機会となるかもしれない。

ヒルマン¹⁶⁾は、古代における心理学的伝統である感情の人格化について、次のように書いている。「[それは] 世界を理解し、同時に世界の内に存在するために必要な方法であった。それは、ギリシャ人やローマ人たちによって始められた。彼らは、少し例をあげると、名声、傲慢、夜、醜さ、タイミング、希望、などの心霊的な力を人格化した。人格化は、それらの区別に役立つばかりでなく、それらに心から近づくことを可能にするような、人間的な形象をかりた事物のもう一つ別な愛し方、想像の仕方への道を与えてくれる」と。ヒルマンは、そうすることによって、想像力を問題や葛藤に向けることができるのだと論じる。人格化されたイメージは、想像することによって意識にのぼり、さらに都合のよいことに、見えるように表現することが可能なのである。また、ユングの考えによれば、シンボルには過去と未来の二つの相があるという。彼は、イメージが、過去とはその人の人生における実際の出来事によって、そして現在ならびに未来とはその状況に特有な元型的構造によって、結びついていると考えた⁴⁴⁾。樹木画を描画者自身が投映された姿と考えるならば、その象徴表現を通して自身の内面を人格化させることは、その想像力は自身が経験した危機的な体験に向けることができる。また、描かれる際の描画者の過去の相では、過去に起こった体験と結びついている。

以上のようなことが、3枚目にウロが急激に描かれたことの原因と考えられる。

3. 時期の一致

(1) 時期の決定方法

該当サインから「心的外傷体験（出来事）」の時期を推測することに関して、これまではその時期の一致についての考え方は信頼に足るものではないとされてきたが、本研究において質問紙協力者の9割がその体験の時期と一致したと述べている（表12より）。このことから、この考え方は、樹木画テストの読み方として採用すべきであると思われる。これまで、その時期の推測については様々な方法が立案されてきたが、本研究において最も有効な方法は、根の先端から計測する「Koch法」（Wittgenstein-Index）の方法であった。

大辻⁴¹⁾は、「カウンセリング対象者のトラウマ体験の時期と樹木画のトラウマ指標の樹高上の位置が一致する」ことから、Buck法を採用しているが、今回の研究ではそのような差は見られず、むしろ逆の結果となった。このことから、現時点ではどちらか一方のみ採用することはできず、どちらも計算する必要があると思われる。

(2) どのような体験が描画に表現されるか

「樹木画は、その人の人生における役割と、環境から利益を得る力に関係しているとされている。一般的に樹木画は（中略）、「人生の内容」に関する洞察を提供することについて得に優れていると考

えられている」⁴²とされている通り、その人生における様々な体験が表現されていた。一方で、実際に経験した出来事についての回答を見ていく中で、心的外傷体験と呼ぶには行きすぎともいえる出来事が表現されていることも確認された。従って、トラウマ的な体験に限らず、もっと広くそのサインの意味を考えることが必要ではないだろうか。質問紙に回答した16名のうち、14名が何かしらの体験と一致した（表13）ことは、バック⁸が「被験者自身が“傷ついた体験”をとらえている出来事だけが象徴化されると仮定される」としている点と一致する部分が多い。しかし、その出来事に「引越し」や「弟や妹が生まれる」というものが含まれていたことを考えると、人生における「出来事サイン」とする方が妥当と思われる。心的外傷体験については、「PTSDとは実際は「死」と結びついた疾患である。目の前に「死」の影を垣間見たものだけが、そう診断されるし、この病名を名乗る資格がある」¹⁸とされており、「引越し」などが心的外傷体験になるとは考えにくい。「死」と結びついた体験が描画に反映されるケースも存在する可能性はあるが、心理学的サインとして考える際には、「出来事サイン」とした方が、よりその意味を正確に捉えていると考えられる。尚、ここである「出来事」とは、「災害や事故、病気、家族との離別などにより、何らかの変化が起こり、生活の均衡が崩れた状態」と定義する。

また、被験者の過去の危機について答えてもらうということは、扱うデータが侵襲性の高いために、取り扱いが難しいというのが考えられる。これまでに研究があまり行われてこなかったのは、そのような要因も大きな役割を果たしているかもしれないし、そういった点が考慮され、これまでの研究は事例研究の形で行われるものが多かったのかもしれない。

4. 3枚法におけるウロの解釈について

本調査において、ウロが複数枚に描かれ、尚且つその時期に何らかの出来事体験をしたと答えた被験者は5名であった。

それら5ケースについて詳細に検討すると、そのうちの3ケースがそれぞれ同じ時期の位置にウロを描き、その時期に何かショッキングな出来事を体験している。そして、残りの2ケースは、以下のようなものであった。

- ① 2枚目のウロの位置が「肉親が亡くなった」時期（幼少期）と一致し、1枚目のウロの位置が「その死の事実を自覚した」時期と一致した。
 - ② 1, 3枚目で別の時期の位置にウロを描いているのだが、その体験内容が同じ「引越し」であった。
- ①に関しては、2つの体験が連続線上の出来事であり、両方の描画を通して一つの出来事を表現しているという考え方もできる。
- ②に関しては、2つの体験が同じ内容のもので、やはり関係性があるものであると考えられる。

以上のことから、3枚法において複数枚にウロが描かれたときに、それらを別物として考えるので

はなく、関係性のあるものとして解釈することで、より描画者のよりよい理解に繋がるのではないだろうか。桑原ら²⁶が、「3枚の連続性、不連続性を考え、3枚セットで解釈することが必要となる」と述べているように、描画者は3枚の描画を通してその内面を表現しているのであり、ウロの解釈に際しても全く同じことが言えると思われる。

VI. 結論

本研究において、以下の4点について報告した。

- ①「心的外傷体験（出来事）」のサインとして、どのような描画表現を採用するのかについて、その結果として、従来挙げられていたウロ・幹の傷・裂けた幹・切られた枝等に加えて、幹の両側の切れ目・幹に止まる虫・幹に描かれた顔・幹に描かれた渦も、該当サインとして採用できる可能性があることが示唆された。特に、幹の両側の切れ目に関しては、描かれた二次元の描画を三次元で捉えることによって、より被験者の内面について示唆が得られる可能性があることが考えられる。
- ②それらの該当サインについて、どれだけの出現頻度があるのか、1・2・3枚目それぞれについて見ていき、3枚目に描かれやすいということが示唆された。このことは、1・2枚目を描いた被験者にテスト場面への慣れが生じたこと、また「夢の木」を描かせるという教示が、被験者に枠を設定する働きをし、その防衛を弱め退行を促進させることにつながり、そのことによって被験者が内面の傷を描きやすくなったと考えられる。
- ③該当サインから「心的外傷体験（出来事）」の時期を推測することに関して、これまではその時期の一致についての考え方は信頼に足るものではないとされてきたが、本研究において質問紙協力者の9割がその体験の時期と一致したと述べている。このことから、この考え方は、樹木画テストの読み方として採用すべきであると思われる。これまで、その時期の推測については様々な方法が立案されてきたが、本研究において最も有効な方法は、根の先端から計測する「Koch法」の方法であった。
- ④複数枚に該当サインを描かれたケースについては、それぞれのサインが描かれた時期が違ったとしても、それら複数の出来事に関係性がある可能性が示唆された。

VII. 文献

引用文献

- 1) Ave-Lallemant, U.: 『Baum-Test.』 Ernst Reinhardt Verlag, München, 1994. (渡辺直樹・野口克己・坂本堯訳: 『バウムテスト——自己を語る木: その解釈と診断』, p.1-15. 川島書店, 東京, 2002)
- 2) 前掲書2) p.5-6.

- 3) Bolander, K.: 『Assessing Personality Through Tree Drawings』. Basic Books, 1977. (高橋依子訳: 『樹木画によるパーソナリティの理解』. p.74-75. ナカニシヤ出版, 京都, 1999)
- 4) 前掲書5) p.196-200.
- 5) 前掲書5) p.257.
- 6) 前掲書5) p.293-300.
- 7) Buck, J. N.: 「The H-T-P Technique. A qualitative and quantitative scoring manual.」 J. Clin. Psychol. Monogr. Suppl. 5:1-120, 1948. (加藤孝正・荻野恒一訳: 『HTP診断法』. p.48-49. 新曜社, 東京, 1982)
- 8) 前掲書11) p.49.
- 9) de Castilla, D.: 『Le test de l'arbre: Relation humaines et problems actuels』. Masson, Paris, 1995. (阿部恵一郎訳: 『バウムテスト活用マニュアル——精神症状と問題行動の評価』. p.21-22. 金剛出版, 東京, 2002)
- 10) 前掲書20) p.23-24
- 11) 前掲書20) p.27-32.
- 12) 前掲書20) p.33-39.
- 13) De Castro Carneiro, F.: 「O Desenho da Arvore e o Indice de Wittgenstein. Analise」 Psicologica, 12(4):539-545, 1994.
- 14) Fernandez. L.: 『Le test de l'arbre Un dessin pour comprendre et interpreter』. Collection PsychPocket, Editions in Press, 2005. (阿部恵一郎訳: 『樹木画テストの読みかた——性格理解と解釈』. p.19-21. 金剛出版, 東京, 2006.)
- 15) 前掲書26) p.38-40.
- 16) Hillman. J.: 『Re-Visioning Psychology』. New York NY, Harper & Row, with new preface, 1992. (入江良平訳: 『魂の心理学』. p.56. 青土社, 東京, 1997)
- 17) 深田尚彦: 「幼児の樹木描画の発達的研究」. 心理学研究28(5), 286-288, 1957.
- 18) 岩波明: 『狂気の偽装——精神科医の臨床報告——』. p.22. 新潮社. 東京, 2006.
- 19) Koch, K.: 『Der baumtest:Der baumzeichenversuch als psychodiagnostisches hilfsmittel』. Hanx Huber, Bern u.stuttgart, 1949.
- 20) Koch, K.: 『The Tree test: The tree-drawings test as an aid in psychodiagnosis. 2nd ed.』, Hanx Huber, Bern u.stuttgart, 1952. (林勝造訳: 『バウムテスト——樹木画による人格診断法』. p.11. 日本文化科学社, 東京, 1970 [日本語訳は1952年に出版された英語版からの翻訳])
- 21) 前掲書35) p.35.
- 22) Koch. K.: 『Der Baumtest:Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. 3rd enl.ed.』. Hanx Huber, Bern u.stuttgart, pp.45-48, 1957. (山下真理子訳: 『バウムテスト事例解

- 釈法』. p.4-7.日本文化科学社, 東京, 1980.)
- 23) 小坂茂:『バウムテスト——樹木画による性格診断の研究——』. p.9-10.ユニオンプレス, 大阪, 2004.
- 24) 国吉政一・林勝造・一谷彊・津田浩一・斎藤通明:『バウム・テスト整理表』. p.2-7.日本文化科学社, 東京, 1980.
- 25) 桑原尚佐・前田亨・重本淳一・平谷文子・盛山文雄・加治清・古田島匠・宮原育子・大島元子・盛山和子・小林睦:「少年事件における心理アセスメント——「夢の木法」を中心として——」. 調研紀要, 77, 1-31, 2003.
- 26) 桑原尚佐・盛山文雄:「少年事件におけるバウムテスト「夢の木法」の活用(1)」. 犯罪心理学研究40特別号, 122-123, 2002.
- 27) Leibowitz, M.:『 Interpreting Projective Drawings: A Self Psychological Approach』. Brunner/mazel, 1999. (菊池道子・溝口純二訳:『投射描画法の解釈』. p.64.誠信書房, 2002)
- 28) 前掲書44) p.67.
- 29) Lurker.M.:『DER KREIS ALS SYMBOL im Denken,Glauben und Künstlerischen Gestalten der Menschheit.Rainer Wunderlich Verlag Hermann Leins GmbH&Co., Tübingen,1981. (竹内章訳:叢書・ユニバルシタス342 『象徴としての円——人類の思想・宗教・芸術における表現』. p.101. 法政大学出版局, 東京, 1991)
- 29) Lyons, J.:「The Scar on the H.T.P.Tree」. J. Clin. Psychol. 2(11);267-270, 1955
- 30) 前川あさ美:「統合型HTP法を通じた描画体験過程の分析——絵と描く者と描画分析の交わりとこころ——」. 研究助成論文集32, 80-91, 1996.
- 31) 三沢直子:『描画テストに表れた子どもの心の危機——S-HTPにおける1981年と1997～99年の比較』. p.12-40.誠信書房, 東京, 2002.
- 32) 森谷寛之:「枠づけ効果に関する実験的研究」. 教育心理学研究31(1), 53-58, 1983.
- 33) 盛山文雄・桑原尚佐:「少年事件におけるバウムテスト「夢の木法」の活用(2)」. 犯罪心理学研究40特別号, 124-125, 2002.
- 34) 中井久夫:「精神分裂病者の精神療法における描画の使用——とくに技法の開発によって作られた知見について——」. 芸術療法 2, 77-89, 1970.
- 35) 中井久夫:「枠づけ法覚え書き」. 芸術療法 5, 15-19, 1974.
- 36) 中野久夫:『芸術療法入門』. p.96.造形社, 東京, 1970.
- 37) 中尾舜一・吉川公雄:「バウムテストの人間生態学的研究 1. 医学部進学課程学生の調査から」. 久留米大学論叢23(2), 1974.
- 38) 小川俊樹・田辺肇・伊藤宗親:「わが国における臨床心理検査の現状」. 日本心理臨床学会第16回大会発表論文集. 116-117, 1997.

- 39) 小川芳子：「樹木画テスト17年の経年変化」．共立薬科大学研究年報告，40，5-17,1995.
- 40) 小川芳子・大丸三恵・大森郁子・早川千恵子：「集団実施のパウムテストにみる学生気質—第1報—」．共立薬科大学研究年報告，31，17-33，1986.
- 41) 大辻隆夫：「投影樹木画法におけるトラウマ指標の統合化とそれを巡る2，3の問題点」．児童学研究，32，10-15，2002.
- 42) Oster. G. D. and Gould. P.: 『Using Drawings in Assessment and Therapy: A Guide for Mental Health Professionals』. Brunner/Mazel, New York, 1987. (加藤孝正監訳：『描画心理学双書⑧ 描画による診断と治療』. p.44. 黎明書房，愛知，2005)
- 43) Rubin. J. A.: 『Approaches to Art Therapy: Theory and Technique』. Mark Paterson and Associates, Wivenhoe, Essex, U. K.. 1987. (徳田良仁監訳：『芸術療法の理論と技法』. p.123. 誠信書房，東京，2001)
- 44) 前掲書68) p.127.
- 45) 佐藤正保・青木健次・三好暁好：「大学生に集団的に実施したパウムテストの量的分析の試み（第1報）」．臨床精神医学7(2)，207-219，1978.
- 46) 高橋雅春：『描画テスト診断法——HTPテスト——』. p.78-80.文教書院，東京，1967.
- 46) 高橋雅春：『描画テスト入門——HTPテスト——』. p.71.文教書院，東京，1974.
- 47) 前掲書73) p.71-72.
- 48) 高橋雅春・高橋依子：『樹木画テスト』. p.61. 文教書院，東京，1986.

参考文献

- ・Abel. T. M.: 『Psychological Testing in Cultural Contexts』. Colleague & University Press Services, Inc. (高橋雅春・空井健三・上芝功博・野口正成訳：『文化と心理テスト』. サイエンス社，東京，1980)
- ・愛原由子：『子どもの潜在脳力を知るパウム・テストの秘密——14年・20万例による不思議な実証』. 青春出版社，東京，1987.
- ・Bachelard. G.: 『La Terre et les rêveries de la volnté』. José Corti, 1948. (及川馥訳：『大地と意志の夢想』. 思潮社，東京，1972)
- ・Brosse. J.: 『Mythologie des arbres』. Librairie, Plon, 1989. (藤井史朗・藤田尊潮・善本孝訳：『世界樹木神話』, 八坂書房，東京，2000)
- ・Campbell. J.: 『Mythic Image』. Princeton University Press, New Jersey, 1974. (青木義孝・中名生登美子・山下主一郎訳：『神話のイメージ』. 大修館書店，東京，1991)
- ・Di Leo. J. H.: 『CHILD DEVELOPMENT; Analysis and Synthesis』, Brunner/Mazel, 1977. (白川佳代子・石川元訳：『絵にみる子どもの発達——分析と統合』. 誠信書房，東京，1999)

- ・ 福西勇夫・菊池道子編：『現代のエスプリ 390心の病の治療と描画法』。至文堂，東京，2000.
- ・ 一谷 彊：「バウムテスト診断的解釈の基礎理論と実際の技法(I)：診断的解釈の理論と手順」．京都教育大学紀要 Ser. A, 93, p.55-77. 1998.
- ・ 一谷 彊：「バウムテスト診断的解釈の基礎理論と実際の技法(II)：診断的解釈の実際の展開」．京都教育大学紀要 Ser. A, 93, p.79-92, 1998.
- ・ Lurker. M.: 『DIE BOTSCHAFT DER SYMBOLE In Mythen, Kulturen und Religionen』. Kösel-Verlag GmbH&Co., München, 1990. (林捷・林田鶴子訳：叢書・ユニベルシタス687『シンボルのメッセージ』。法政大学出版局，東京，2000.)
- ・ 森谷寛之・森省二・大原貢：「バウム・テストにおける枠づけ効果」．心理臨床学研究1(2), p.73-81, 1984.
- ・ 長野正稔：「被虐待児童のバウムテストに関する予備考察」．研究紀要(27), p.35-40, 2005.
- ・ 中園正身：「樹木心理学の提唱と樹木画法への適用」．北樹出版，東京，2005
- ・ 中農浩子・前田研史・富田和代・澤田和加子・富田忠明・山本悦代・金澤忠博・西澤哲・小林美智子：「被虐待児の描画に表現される心理的特性について——被虐待体験の内的世界を理解するために——」．研究助成論文集 (36), p.48-56, 2000.
- ・ 大辻隆夫・塩川真理・田中野枝：「投映樹木画法における実の教示を巡るBuck法とKoch法の比較研究」．児童学研究33, p.19-23, 2003.
- ・ 高橋義孝：『藝術と精神分析』。人文書院，京都，1979.
- ・ Todorov. T: 『THÉORIES DU SYMBOLE』. Editions du Seuil. Paris, 1977. (及川馥・一之瀬正興訳：叢書・ユニベルシタス『象徴の理論』。法政大学出版局，東京，1987)
- ・ 山中康裕・皆藤章・角野善宏：『京大心理臨床シリーズ I バウムの心理臨床』。創元社，大阪，2005.

資料

調査の手順

① - (1)もしくは① - (2)から順番に、図を参考にしながら、該当する項目について回答して下さい。

① - (1): 図1にあるような特徴を描かなかった方。

< a ~ i ウロ (節穴)、j. 幹の傷、k. 折れた枝、l. 切られた枝、m. 幹の片側にある穴、n. 幹の裂け目、o. 幹の片側の節穴、p. 細かくて接近したラインの傷跡 >

これらの特徴を描いた方は① - (2)に進んでください。

これらの特徴を描かなかった方は⑥にお進みください。

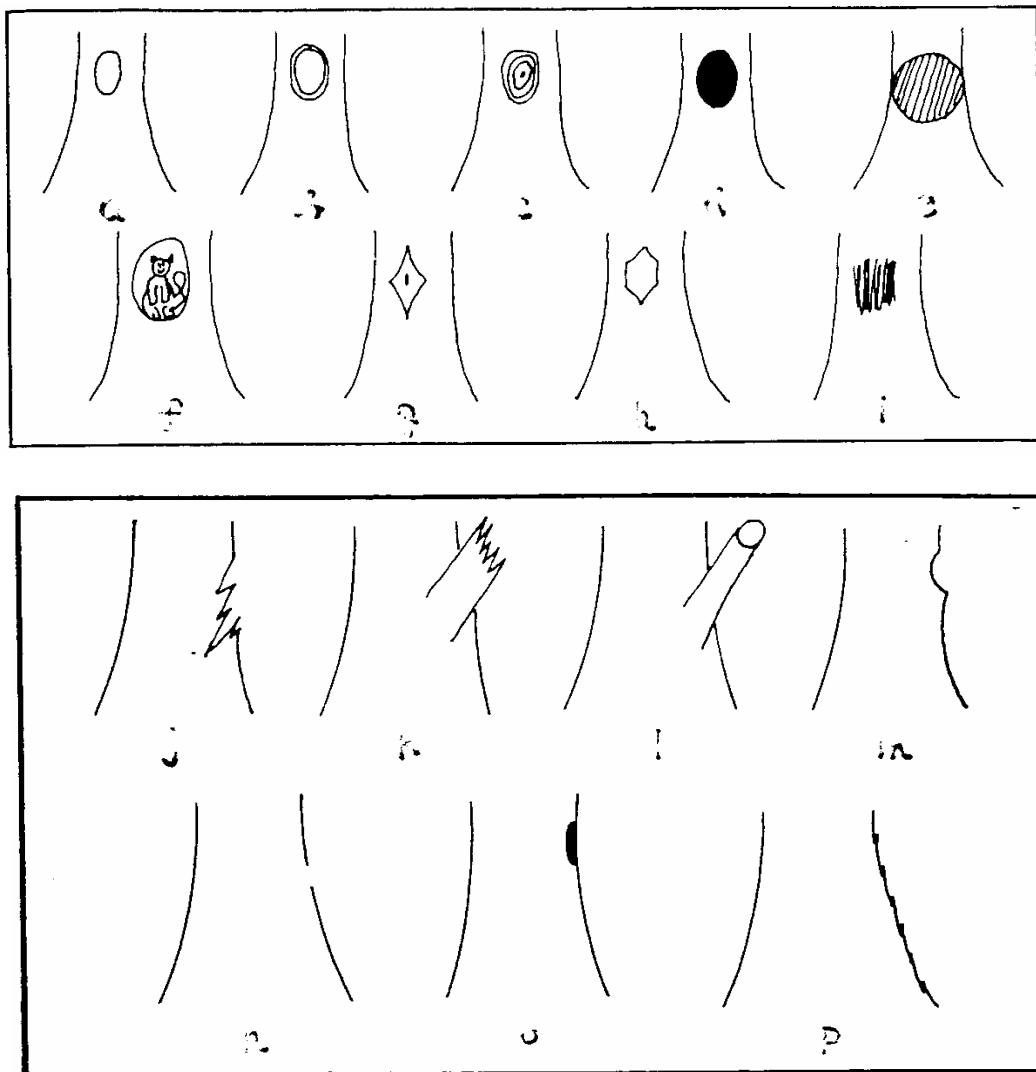


図 1

①-(2): 樹木画3枚の中で、図1にあるような特徴を1つまたはそれ以上描いた方

該当する方は、図2を参考にしながら、以下の手順で計算をしてください。

A) 木の下端から、樹木の上端までの高さを計測してください。(何センチ何ミリまで)

B) 木の下端から、ウロなどの特徴の中心までの高さを計測してください。(何センチ何ミリまで)

C) [Aで計算したもの] : [Bで計算したもの] = [あなたの年齢 (何歳何ヶ月)] : X

より、Xを求めてください。

その際に、あなたの年齢は小数第一位までの数にしてください。(例: 20歳6ヶ月⇒20.5)

$X = [B \text{で計算したもの}] \times [あなたの年齢] / [A \text{で計算したもの}]$ となります。

Xが求められたら、回答用紙の所定の欄に「X=〇〇」と記入してください。

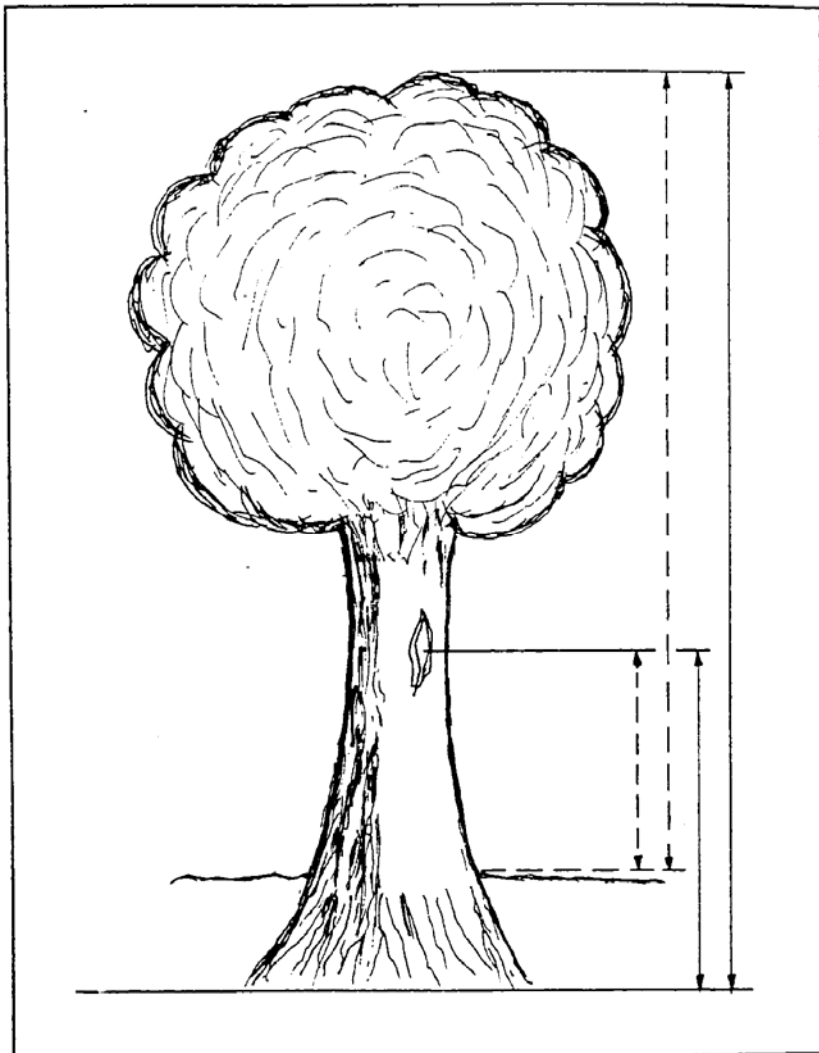


図2

⇒計測と計算をした後、②へ

②： 同じように、以下の手順で計算をしてください。（地面の線を描かれた方のみ）

- D) 地面の線から、樹木の上端までの高さを計測してください。（何センチ何ミリまで）
E) 地面の線から、ウロなどの特徴までの高さを計測してください。（何センチ何ミリまで）
F) [Dで求めたもの] : [Eで求めたもの] = [あなたの年齢（何歳何ヶ月）] : Y
で、Yを求めてください。
その際に、あなたの年齢は小数第一位までの数にしてください。（20歳6ヶ月⇒20.5）
 $Y = [Eで計算したもの] \times [あなたの年齢] / [Dで計算したもの]$ となります。
Yが求められたら、回答用紙の所定の欄に「Y=××」と記入してください。

⇒計測と計算をした後、③へ

③： XとYが求められた方

- 求めたXとYを年齢（何歳何ヶ月）に換算してください。（例：5.5は5歳6ヶ月）
あなたがX・Yで求めた年齢のときに経験した出来事・体験の中で、環境の変化や転機となった出来事がありましたか？？心当たりがあれば○を、なければ×を回答用紙に記入してください。
（XとYそれぞれについて、○か×でお答えください）

⇒どちらかでも「○」と回答した方は④へ、両方「×」と回答した方は⑤へ

④： 計算した年齢と実際の経験の年齢が合った方

③で「○」と回答した出来事は、リストにある出来事のなかで、どれに該当しますか？？該当するものの記号を回答用紙に御記入ください。（複数回答可）

- <出来事リスト> A) 引越し・転校
B) 近い人との離別
C) 妹・弟が生まれた
D) 何か事件に巻き込まれた、または目撃した
E) その他、ショッキングな体験
F) 答えたくない

また、その出来事について、a) その当時はどう感じていたか、それと比較して、b) 今振り返ってみてどう感じているのか、について御記入ください。

⇒回答後、⑦へ

⑤： 計算した年齢と実際の経験の年齢が合わなかった方

(1)： ③で求めた年齢「以外」の時に、上の＜出来事リスト＞の経験をされた方は、その該当するものの記号を回答欄に記入し、その体験をした年齢を記入してください。

(2)： ③で求めた年齢「以外」の時にも、上の＜出来事リスト＞にある経験をされたことがない方は、回答欄に「×」と記入してください。

⇒回答後、⑦へ

⑥： 図1のような特徴を描かなかった方

あなたは人生の中で、以下のような出来事を経験したことが有りますか？経験がある出来事の記号とその時期を回答用紙に御記入ください。（複数回答可）

- ＜出来事リスト＞
- A) 引越し・転校
 - B) 近しい人との離別
 - C) 妹・弟が生まれた
 - D) 何か事件に巻き込まれた、または目撃した
 - E) その他、ショッキングな出来事
 - F) 答えたくない

⇒回答後、⑦へ

⑦： 調査は以上です。

御協力ありがとうございました。

回答用紙

※回答してくださる方は「回答する」に○を、回答されない方は「回答しない」に○を付けてください。

回答する : [_____]

回答しない : [_____]

① - (2) : 計算したXの値を記入してください。

X = _____ (1 枚目) X = _____ (2 枚目) X = _____ (3 枚目)

② : 計算したYの値を記入してください。

Y = _____ (1 枚目) Y = _____ (2 枚目) Y = _____ (3 枚目)

③ : XとY、それぞれの時期について、何か人生の転機となるような出来事に心当たりがありますか？

X 1 枚目 : _____ 2 枚目 : _____ 3 枚目 : _____

Y 1 枚目 : _____ 2 枚目 : _____ 3 枚目 : _____

※○か×でお答えください。

④ : ③で答えたX・Yの時期に体験したのは、どのような出来事でしょうか？記号でお答えください。

a) (その当時はどう感じたか) _____

b) (今振り返ってみてどうか) _____

⑤ - (1) : 経験した出来事 _____ その時の年齢 _____ 歳くらい

⑤ - (2) : どれも経験していない : _____

⑥ : A～Fのような経験をされたことがある方は、それが選択肢のうちどれに当てはまるかを記号でお答えください。

経験の出来事 : _____ その時の年齢 _____ 歳くらい